

怪談物件マヨイガ2

蒼月海里

第二回

もう一人の呪術師

「九重さん、呪術屋と呪術師って、どう違うんですか？」

それは、榊が感じた素朴な疑問だった。

呪術師という職業は、フィクションの世界で見たことがある。だが、九重が名乗っているのは『呪術屋』だ。

「同じだ」

九重は、さらりと答えた。

「えっ、同じなんですか？」

「正確には、呪術師というのが職業で、『呪術屋』は屋号だ」

「成程。マクドナルドで喩えると、呪術屋がマクドナルドで、呪術師はファストフード店って感じですかね」

「そう考えてもらっていい」

九重の説明で、榊はすんなりと理解出来た。それにしても、あまりにも直球な屋号だが。

「そう考えると、ジャンク屋さんも同じようなパターンか……」

九重の事務所で鉢合はちあわせた青年のことを思い出す。半地下の住民達は、屋号にそれほどこだわりがないのだろうか。

「何故なぜ、そんなことを聞く？」

今度は九重が尋ねる番だった。

「いやあ、九重さんみたいに呪術なりわいを生業なりわいにしている人って、他にいるのかなと思ひまして」

「いるだろうな。故人だが、有名なのは安倍晴明あべのせいめいだろう」

「安倍晴明はもう、ほとんどフィクションだと思ってましたけどね……」

安倍晴明といえは、平安時代の超有名陰陽師おんみょうじだ。呪術に精通しており、フィクションの世界に重要な役割を背負って登場し、美味おいしいところを持って行くイメージが強い。

「呪術は、古代中国が起源の陰陽道が元になっていると言われている。俺が使う呪文じゆもんもその一つだ」

「きゅーきゅーなんとかっていうカッコいいやつですね！」

「急急きゅうきゅう如律令にりりつりょう」

勝手に盛り上がる榊に、九重は静かに訂正した。

「『急々に律令りつりょうの如ごとくに行え』という意味だな。これも、古代中国から伝わったものだ。本来は、速すみやかに命令が実現されるよう行政文章もんごんに記される文言もんごんだった。しかし、数多あまたの術者がこの言葉を用いて

術を行使することによって、この言葉自体に力が宿るようになったという流れだな」

「へえええ……！」

また一つ賢くなったと言わんばかりに、榊は目を輝かせる。

「そう言えば、九重さんがやる動作って、五芒星ごぼうせいを描いているんですよね」

榊は九重の印を切る動作を真似する。

「ああ。五芒星とは何か、知っているな？」

「はい。魔除けまよの一種ですよね」

「ああ。陰陽五行説いんようごぎょうせつの五元素の相克そうこくを表したものだ。一筆書きで描くことでその場を閉じ、魔を退ける役目を担っている。他にも、安倍晴明の紋もんでもあるな」

五芒星は、セーマンとも呼ばれているという。

他にも、横縦九本の線を組み合わせた『九字』という印もあるらしい。こちらはドーマンと呼ばれることもあり、魔を封じ込める役目があるそうだ。

「まあ、五芒星も魔を封じる効果があるとも言われている。俺の用途は、どちらでもないが」

「えっ、そうなんですか？」

「五芒星の各頂点は、木・火・土・金・水の元素を示している。陰

陽道では、万物はそれら五つの元素で構成されるとし、呪いもまたそれに準じる。俺は呪いに含まれる五元素をそれぞれ打ち消して、対象の呪いを解いているんだ」

「へ、へええ？」

榊は感心しながらも首を傾げる。

「よく分からないという顔をしているな」

「なんか、全体的にピンと来なくて。五つの元素っていうのも聞いたことがあるような無いようになって感じだし……」

「そういうものだろう。一般人には馴染みが薄いはずだ。風水に多少精通している者ならば別だろうが」

「風水！」

榊はハツとして目を剥く。

「……どうした」

「むしろ、不動産屋なら風水を勉強するべきでは……！」

「風水を気にする客のために勉強するのは悪くないだろう。だが、知れば見える必要がないものまで見えてくる。選別する手間が増えるかもしれないな」

「見える必要がないものって……」

「風水を気にして建てられた物件ばかりではないだろう？ 君は根が善人だから、風水を気にしない客にも勧め難くなりそうだと思う」

てな」

「う、うーん」

榊は否定が出来なかった。

きつと風水を知れば、何も気にしない入居者にも風水的にいい物件を勧めたくなる。そうすると、風水的に良くないとされた物件はどうなるのか。それもまた、オーナーから預かった大切な物件なのに。

「知識を持つということは、それを正しく使う精神性が大事だということだ。君がもう少し割り切れるのならば、俺は君が学ぶことに賛成だ」

「うーん。風水を気にするお客さんにも対応出来るように、少しずつ勉強します。割り切る強い意志を持てるようにしつつ……！」

榊はぐつと拳こぶしをにぎって決意をする。

「それにしても、万物が五つの元素で構成されていて、九重さんはそれを打ち消せるなんて凄いですね。もしかして、九重さんがその気になれば僕も消……！」

九重の話が本当ならば、榊もまた五つの元素で構成されていることになる。恐ろしい事態を想像しつつ九重の方を見やるが、九重は首を横に振った。

「俺の力は認知——概念の世界にしか働きかけられない。物理的な

打ち消しは出来ないな」

「よかったあ……」

「榊は、ほっと胸を撫なで下ろす。

「でも、九重さんは知識も正しく使う精神性も持つてる人だから、物理的に打ち消せるとしても安心ですね」

九重は不思議な力を持っているが、それは常に人のために使っている正義の味方だ。榊は九重の正しさを理解していたので、安心出来た。

だが、九重は黙り込んだままだった。

「こ、九重さん？ まさか、物理的に打ち消せるなら僕を消したいとか思ってますんよね……」

念のため尋ねる榊であったが、九重は「大丈夫だ」と否定した。

「自分で言っておきながら、『正しい』とは何なのかと考えていただけだ」

「おおぅ……、九重さんは真面目ですね。僕は、九重さんみたいな人が『正しい』と思ってますけど」

「……どうだろうな。君は、俺の罪を知らない」
罪。

九重が紡つむいだ単語は、やけに重々しく感じられた。彼のわずかに伏せられた瞳は、榊が知り及ばない遥はるか遠くを見つめているようだ

った。

榊は黙り込み、九重もまた、沈黙する。

ずつしりとした静寂が二人の間に漂い、それは永遠に続くように思えた。榊はじつとりと、握った拳が汗ばむのを感じる。

だが、九重が先に口を開いた。

「話は戻るが、俺のように呪いに精通した者はいる。しかし、裏社会に通じている者も少なくない」

「ああ……、フィクションの呪術師あるあるですね」

「呪いは現代の科学で証明出来ないからな。相手を呪っても犯罪として扱われない。政界にも、実力者が何人か食い込んでいるはずだ」

異能を持つ呪術師達が人知れず裏社会で戦っていると思うと、榊は一瞬だけワクワクしたが、冷静になってみればとんでもない話だと思った。裏社会の異能バトルは、フィクションの中だけで充分だ。

「でも、九重さんも実力がある人ですし、政界に食い込めたのでは……」

「俺は金が欲しいわけではない」

九重はきっぱりと言った。

確かに、九重が請求する額は、害虫処理業者などとそれほど変わらない。そんな良心的な価格だからこそ、会社ぐるみで九重に依頼が出来るのかもしれない。経理課の帳簿上では、呪術屋に対する依

頼ではなく、もっと現実的な科目で処理されているかもしれないなかった。

「じゃあ、どうして呪術屋を……？」

「贖罪、だな」

また、罪の話だ。

榊は何に対する贖罪か尋ねたかったが、口に出す勇氣はなかった。九重もまた、それ以上、榊に語ろうとしなかった。

「いずれにしても、本来ならば、頻繁ひんぱんに呪術師と会うことはないだろう。彼らのほとんどは、何らかの組織に所属しているか、表社会に顔を出さないかのどちらかだ。もし、俺のように個人で金目的ではなく活動している者がいたら——」

「いたら……？」

榊は、思わず固唾かたずを呑む。妙な緊張感を覚えてか、胃から酸っぱいものがこみ上げてきた。

「そいつはよほどの善人か、よほどの信念を持った奴やつだ。両方の場合もある。君も、用心するといい」

「善人でも、ですか……？ それなら別に、用心する必要はないんじゃないあ……」

榊は不思議そうに目を瞬しばたかせる。だが、九重は眉間みけんに皺しわを刻み込み、苦々にくにくしい顔をした。

「君は忘れたのか。願いは呪いにもなるんだ」

「あっ……」

かつて、マヨイガの創立者の願いが暴走し、会社と会社が預かっていた物件ごと巻き込まれたことを思い出す。あれも、元々は創立者である岡野おかの氏の善意からなるものだった。

「金銭を目的とした者は分かりやすい。だが、善意は分かり難い。

善の基準は、人それぞれだからだ」

「そう……ですね」

世のため、人のために善行を尽くす。それは良いことだと信じて疑わなかったが、そうとも限らないと榊は学んだ。

人の数だけ人の幸福があり、自分の幸福が他人の幸福であるとは限らない。

榊も、自身は善であるように努めているが、誰かにとっては善でないかもしれない。くれぐれも、自分の善が正しいと思いつい込む呪いにかからないようにしなくてはと、己を戒めたのであった。

そんなことを思い出しながら、榊はパソコンのモニターをぼんやりと眺めていた。

ブラウザには検索エンジンが表示されていて、「風水 不動産」という検索ワードを入力したまま止まっていた。

インターネットで検索した方が早いが、ネットの情報は玉石混淆だ。帰りに本屋にでも寄ってみようかと榊は思った。

だが、その時――。

「なにボサツとしてんだ！ さっさとしろ！」

「ひっ、すみません！」

いきなり聞こえて来た怒号に、榊は反射的に謝る。

しかし、その怒号は受付のカウンターからであった。

受付といっても、出入り口に面した書類棚をカウンター代わりにしている程度である。応対しているのは受付の係員などではなく、

榊と同じ部署の女性社員・大森だ。
おもり

対するは、初老の男性だった。

身体つきも顔つきも厳いかつく、肩肘かたひじを張って更に大柄に見せている。

彼は大声で、大森に怒鳴りつけていた。

「うわー、直接乗り込んで来たよ。あのクレーマー……」

榊の近くの席にいる同僚が、顔を曇らせる。

「知ってるのか？」

「むしろ、お前はあの人の電話を取ったことがないのか？ いちゃもんみたいなクレームをつけて来て、延々と愚痴ぐちりまくるんだ」

「……一回だけ、取った気がする」

榊は記憶の糸をたぐり寄せる。たしか、彼の名は矢内やないといった。

彼が借りた賃貸の近所には小学校があり、登下校時間になると大勢の小学生が家の前を歩くという。

それが煩うるさいからどうにかしろと、マヨイガに連絡を寄こしたことがあった。小学校が近くにあるというのは、入居前に説明していたというのに。

とにかく、不動産屋ではどうにもならないレベルのクレームを寄こしては、電話越しに怒り狂うということで社内では有名だった。

「大森さん、昨日、あいつの電話を受けたらしいんだ。あいつの対応は初めてだったから、滅茶苦茶めちゃくちや丁寧ていねいにやったらしくて……」

本来ならば、丁寧に対応すれば感謝をされる。しかし、矢内に対しては増長させるきっかけとなってしまった。

大森は腰が低く、弱気なところもある。そのせいで、すぐに謝る癖もあり、そこを付け込まれたのだろう。

「お前じゃ駄目だ！ 上司を出せて言ってるだろう！」

矢内は大森を怒鳴りつける。うろたえていた大森が「は、はい」と返事をするのと、見かねた柏崎かしわざきが立ち上がるのは同時だった。

「私が上司の柏崎です」

女性にしては背が高い柏崎が、背筋を伸ばして颯爽さつそうと現れる。彼女は真まっ直すぐに矢内を見つめ、矢内は一瞬だけたじろいだ。

「お話を聞く限りだと、部下が失礼を働いたようですが、詳細をお

尋ねしても？」

柏崎は、顔を真っ青にしている大森の肩を優しく叩き、そつと下からせる。堂々たる態度の柏崎に矢内は尻込みしりこしていたが、それも、長くは続かなかった。

「お前が上司だと？」

「は、」

「女じゃ話にならん！ 男を出せ！」

その言葉は事務所内に響き渡った。

「は？」と榎の同僚が声を漏もらす。榎も、同じように声を漏らしていたかもしれない。その場にいた柏崎の部下達は、みな、一斉に矢内を睨にらみつけた。

だが、当の矢内は全く気づいた様子はない。「女が出しゃばるな！」と差別的な言葉を重ねた。

「しかし、この場の責任者は私ですのぞ」

「なんだとお？」

矢内は事務所内をぐるりと見回す。彼の侮蔑おごり的な視線が、榎や同僚達をねつとりと舐なめた。

「最近の若造は、女に使われているのか！ 男として情けないと思わないのか！」

「あいつ……」

榊の同僚は立ち上がろうとする。だが、榊は「やめろって」と制止した。

「腹が立たないのか……」 柏崎さんが馬鹿にされてるんだぞ」

「腹が立たないわけがない……！ でも、あいつは客なんだ。僕達が突っかかったら、柏崎さんの責任になっちゃうだろ……！」

「くそっ……！」

同僚は怒りに震えながらも感情を押し殺す。榊も、自然と握り拳に力が入った。

柏崎は尊敬出来る上司だ。厳しくもあるが、部下の失敗をフォローしてくれるし、成長を促^{うなが}してくれる。榊も、何度柏崎に助けもらったか分からない。

だが、榊達の気持ちなど知らぬ矢内は、柏崎に次々と罵声^{ばせい}を浴びせる。あまりにも差別的で、聞くに堪^たえないものであった。

それでも、柏崎は黙って耐えていた。それを見ていた大森は泣きそうになり、榊もまた、同僚のように立ち上がろうとしたその時――。「いやあ、申し訳御座いませぬ。お客さま、何かご不便をおかけしてしまいましたようで」

外出から帰って来た部長が、ぬっと矢内の背後から現れた。

腰が低い中年男性が現れたためか、矢内は「あんたみたいなのを待っていたんだ」と罵詈雑言^{ばりぞうごん}をやめた。

その後は、延々と上から目線の『指導』とやらを部長に述べ、笑顔を保ったままペこぺこ頭を下げる部長に満足してか、ようやく帰って行った。実に、矢内が会社に訪れてから、二時間後のことであつた。

「はー、疲れた……」

エレベーターまで矢内を見送った部長は、げっそりしながら溜息ためいきを吐く。

「申し訳ございません、私が至らなかつたばかりに」

柏崎は、固い表情で頭を下げる。だが、部長は「とんでもない！」と首を横に振った。

「ああいうのばかりはどうしようもない。君に落ち度なんてないよ。むしろ、よく耐えてくれた」

「仕事ですのぞ」

柏崎はなんとということもないように答えた。

「君は本当に出来た人だよなあ。優秀な人材に性別なんて関係ないのにさ。でも、古い価値観を持つてるとそうじゃないみたいなんだよね。困ったもんだ……」

部長は深い溜息を吐く。

榊も、古い価値観のことは知っている。今はジェンダーレスや女性の社会地位の向上が叫ばれているが、それはそもそも、女性を軽

視する人間があまりにも多かったからなのだろう。

女性は家にいて子育てをしなくてはいけない。女性は男性の下につかなくてはいけない。

そんな不平等な価値観が女性を縛り付けていたからこそ、今、反発が起きているのだろう。

家事をするのも子育てをするのも仕事をするのも、性別なんて関係ない。家事や子育てをしたい男性だっているし、仕事をしたい女性だっている。多様な選択肢があるからこそ、個々が生きやすくなるはずなのに。

「大丈夫か？」

柏崎は、大森に問う。

あれだけ罵られたにもかかわらず、彼女は部下の心配をしていた。大森は背筋を伸ばし、「は、はい！ お陰様で！」と答えた。

「対処し切れないクレームがあつたら、すぐに私を呼べ。ああいう手合いが来た時は——」

「僕がいる時は僕を呼んで欲しいけど、会社にいることが少ないからなあ……」

部長は渋い顔をする。部長は営業のため、あちらこちらに顔を出さなくてははいけないようで、会社にいる時間が少なかった。

「柏崎君は部下の面倒見もいいし、トラブルの解決も早いし、安心

して社内を任せられるんだけどね。ああいうクレーマーは想定外だったな……」

「……男性のふりでもしましょうか？」

柏崎の提案に、部長は眉を八の字にして迷う。

「柏崎さんの男装は宝塚歌劇団みたいでカッコいいだろうけど、それもなんか負けた感じがするよね。やっぱり、女性社員も男性社員も同じように働いて欲しいし」

「ブチョー、未だに『お茶くみは女じゃないとダメだ』っていう人もいるんですよ」

話を聞いていた若い女性社員は、膨れっ面で口を挟む。

「あるある。俺がお茶を淹れて持って行ったら、『男がお茶くみなんてやるな』って言われたし」

他の男性社員もガツクリと項垂れる。

「それでアタシが指名されたんだよね。指名制のお店じゃないのにさ。ムカついたから出廻らし淹れてやったわ」

若い女性社員は、得意顔で言った。

「僕は、お茶くみをやってみたかったんだけどね。お客さんをもてなすのが好きだから……」

部長は寂しそうな顔をする。

「ブチョーは料理もお好きですもんね」

「そうそう。人の世話をするのが好きだし、専業主夫になりたかったくらいなんだけど、僕の時代は男が出稼ぎをするのが当たり前だったからさ」

本当は妻のために三食作りたいとぼやく部長であったが、気持ちを切り替えてか「よしっ」と手を叩く。

「今後は、男だから女だから云々うんぬんという話は、無視してよろしい。もしトラブルになっても、全部僕が責任を取るから」

「流石さすが、ブチヨー！」

女性社員も男性社員も、手を叩いて喜ぶ。柏崎もまた、静かに息を吐いた。

「柏崎さん、お疲れ様です」

席に戻る柏崎に、榊はねぎらいの言葉を掛けた。すると、柏崎はちよつと困ったように笑い返す。

「見苦しいところを見せたな」

「いいえ。見苦しいのは柏崎さんじゃなくてクレーマーですから！」

「そうそう。俺はマジで柏崎さんリスペクトっす！顎あごで使ってください！」

榊の同僚も、榊と一緒に柏崎をフォローする。

「あんなの前時代の遺物ですよ。今度来たら、変顔で追い返してやりましょう！」

若い女性社員も、鬼瓦おにがわらのような顔をして予行練習をしてみせた。だが、柏崎は苦笑すると、やんわりと返す。

「そうは言っても、彼もうちの客だ。価値観は古いかもしれないが、だからといって排除してはいけない。古い価値観もまた、多様性に含まれるはずだ。その多様性を何処どこまで許容すべきかは、難しいところだな」

「ええー、あんなに酷ひどいことを言われたのに、柏崎さんイケメン過ぎる……」

若い女性社員も榊の同僚も、部長までも、ときめきを感じて胸を押さえる。榊もまたその中の一人であったが、彼の心を支配しているのはときめきだけではなかった。

どうして、柏崎のような人間が理不尽な仕打ちを受けなくてはいけないのか。矢内のような人間を、多様性として認めていいものなのだろうか。

柏崎が言うことは、頭では分かっている。でも、魂では理解が来ない。

心の中に渦巻く負の感情を、榊は皆と同じ笑顔を取り繕つくろいながらも、必死に抑えていた。

その日の帰り、榊は会社の近くの居酒屋に寄った。負の感情を抱

いたまま、家に帰りたくなかったのだ。

「あーあ、嫌な世の中だよな……」

ビールをちびちびと飲みながら、ポツリとぼやく。

だが本当は、榊にとって世の中なんてどうでもよかった。柏崎が馬鹿にされたことが、何よりも許せなかった。

許されるなら、あのクレーマーを殴なぐってやりたかった。

榊は拳を握る。しかし、それはいけないことだと分かっていたので、自制していた。

「誰かを、呪いたそうな顔をしているね」

不意に声をかけられ、榊はハツとした。顔を上げると、若い男性が立っていた。

ロリポップのような髪色で、パステルカラーのコートをまとった、柔らかな顔立ちの年齢不詳の人物だった。現実離れた色合いなのに、やけにしっくりしていて、モデルかなと一瞬だけ思った。

「呪いだなんて、物騒な……」

モデルのような甘い顔立ちの青年にはおおよそ似つかわしくない単語に、榊は苦笑した。

「じゃあ、誰かに対して苛いらだ立ちを抱いだいているように見える、かな。痛い目に遭えばいいのになって、思おもってない？」

自分の心が見通されたような気がして、榊はぞっとした。気づい

た時には、青年は自分の向かい側に座り、相席になっていた。

「痛い目だなんて、そんな……」

「思うのは自由さ。思いだけじゃ痛い目に遭わせることが出来ないし。普通はね」

確かにそうだ。誰かを痛い目に遭わせるのは犯罪だが、思うのは勝手なはずだ。

誰かが、榊が痛い目に遭うよう願っても、それが成就するわけがないのだから。

青年に諭されると、榊は急に気持ちが悪くなった。アルコールが、程よく回ったのかもしれない。

「この店、よく来るのかな？」

「いいえ。今日が初めてです。普段はあんまり飲まないの……」

「そっか。僕のおすすめがあるから、奢^{おご}ってあげるよ」

「いや、そんな——」

悪いです、と制止する前に、青年は店主に注文をしていた。

「気にしないで。勝手に相席しちゃったし」

青年は天真爛漫な笑^えみを湛^{たた}える。なんだか春の日差しのように、安らげる相手だと榊は思った。

「他人を苦しめる人間ってさ、それだけで呪^まいを振り撒^まいていると思うんだよ」

注文の品を待っている時、青年はぼつりとそう言った。

榊の脳裏のうりに、大森を傷つけて柏崎を罵倒ばとうし、皆に迷惑をかけたクレーマーの姿が過るあや。

呪いを振り撒いているというのは、言い得て妙だった。部長も彼の毒気に当あてられて、すっかり参っていた。

「そういう人間がいなくなったら、苦しむ人は少なくなると思わないかい？」

「確かに……そうかもしれないね」

もし、あの男がいなくなったら。

恐ろしい考えだが、考えるだけならば問題ない。彼がいなくなったら、大森も傷つかなかったし、柏崎も侮辱おじよくされなかったし、部長も疲弊しなかったし、自分達の業務も邪魔されなかった。

今日も、忙しくも平穏な日常を過ごせたはずなのに。

そう思った瞬間、榊はどつと今までの思いの丈たけをぶちまけていた。初対面の相手の愚痴うなずだというのに、青年は頷うなずきながら真摯しんしに耳を傾けてくれた。

それはあまりにも心地よく、溢あふれ出る負の感情を洗いざらい吐き出し、やがて、青年に見送られて足取り軽く帰路についたのであった。

「やってしまった……」

翌朝、榊は虚ろな目で天井を仰いでいた。

「どうしたんだ？ また怪現象か？」

出勤した同僚が、からかうように問う。

「いいや。昨日、居酒屋で知らない人に愚痴を全部ぶちまけちゃったんだ……」

「は？ 昨日飲んだの？ 俺も誘えよ」

「いや、なんか一人で飲みたくて……」

むしゃくしゃした気持ちを、一人で抑え込もうとしていた。その矢先に人当たりのよい人物が現れたので、吐き出してしまったのである。

「どこからどこまで喋ったのか、ほとんど記憶がなくてさ。変なこと言っていないといいんだけど」

「へー。それだけ話したのに、連絡先は交換してないのか？」

「してない」

「相手の名前は？」

「何だっけ。七坂さんだか、八坂さんって名前だった気が……」

榊は頭を抱える。記憶には霧がかかり、全てが夢の中の出来事だったのではないかとすら思った。

「飲み過ぎだろ。この辺で働いている人だったら、また会うんじゃないや」

ないか？ その時にお礼とお詫^わびでもしておけよ」

「この辺で……働いてるのかな」

スーツは着ていなかった。服装が自由な職場かもしれないが、それにしても自由過ぎた。やっぱりモデルかな、と首を傾げる。

その時だった。

「あっ」

若い女性社員が声をあげ、鬼瓦のような形相ぎやうそうになる。それを見た榊と同僚はぎよつとするが、すぐにその理由が分かった。

受付の前に、あのクレマー——矢内が立っていたのである。

「あの、何か……」

気づいた時には、榊は立ち上がっていた。他の社員が矢内の対応をして不快な気持ちになるのを避けたかった。

だが、榊に問われても、矢内は辺りをしきりに見回しているだけだった。

「おい」

「は、はい」

「蟲むしを追い払ってくれ」

「えっ？」

榊が声をあげ、同僚と若い女性社員も首を傾げる。

矢内は明らかに、何かを目で追っている。だが、その視線の先に

は、何も見当たらなかった。

「聞こえなかったのか！ 蟲を追い払ってくれ！ そこにいるだろう！」

「いえ、何も……」

矢内は、受付になっている棚の上を指さす。だが、そこには申し訳程度に置かれた『受付』というプレートしかなかった。

「くそっ！ 朝から急に現れて……このっ！ なんで俺について来るんだ！」

矢内は虚空こくうを引つ掻き回す。その必死な表情を見ると、彼が言いがかりのために演技をしているとは思えなかった。

「早く害虫処理業者に連絡してくれ！ お前らでもいい！ こいつを追い払ってくれ！」

「失礼ながら、私達には蟲が見えませんで……」

榊はそう言いながらも、矢内に倣ならって蟲を払う仕草をする。だが、

矢内は「ひいいいっ！」と叫んだ。

「下手へたくそ！ こっちに來たじゃねえか！」

矢内は悲鳴をあげながら、踵かかとを返して事務所を去る。そして、止まっていたエレベーターに転がり込み、エントランスへと向かった。

「な、なんだ？ 飛蚊症ひぶんしょうか……？ それなら、害虫処理業者じゃなくて眼科の領分だけど……」

同僚は呆気あつけに取られていた。

榊の胸の中はざわついていた。飛蚊症といえ、視界に黒い虫のようなものが映る現象である。眼球の中で起きることなので、他人には見えない。

だが、視界に小虫がチラついている程度のはずだ。それが、あんな風に取り乱すだろうか。

先日、吉原きちばらの家に呪いの百足むかでが蔓延はびこっていたのを思い出す。あれも最初はただの暗闇くらやみに見えたが、正体は大量の蟲だった。ならば、もしかしたら――。

「様子を見てくる！」

榊は走り出す。

エレベーターを待っていられず、非常階段を駆け下りて矢内を追った。

彼はよたよたとおぼつかない足取りで走り、時折、両腕を我武者がむしや羅らに振り回していた。

「矢内さん！」

地上たじに辿り着いた榊は、矢内の背中に声をかける。矢内は振り返るが、その表情は恐怖こわばに強張った。

「来るな、蟲が！」

「落ち着いてください！ 蟲なんていないですから！」

榊は叫ぶ。しかし、矢内は止まろうとはしなかった。

矢内は榊から逃れる^{のが}ように道路に飛び出す。だが、歩行者用信号機は赤を示していた。

「矢内さん！」

ブレーキ音を響かせながら、トラックが突っ込んでくる。運転手と矢内、双方の目が合い、その表情は絶望に満ちて――。

「させるか！」

榊は道路に足を踏み込むと、矢内の腕を力いっぱい引っ張った。

矢内の靴が片方脱げたものの、彼の身体は榊とともに歩道へと転がり込んだ。

スピードを落とさきれなかったトラックが、矢内の靴を踏み潰^{つぶ}していく。

トラックは数メートル先で止まり、運転手が窓から青ざめた顔を出す。榊は手を振って無事だということを伝えた。

「はあ、はあ……。危なかった……」

「蟲が……。蟲が……」

榊の腕の中で、矢内は眼球をびくびくさせながら虚空を見つめていた。両腕はだらりと垂れ、全身が溶けてしまったかのように脱力していた。

「呪いの元凶を、救ってしまったんだね」

ふわりと、聞き慣れた声が榊のうなじを撫でる。榊が振り向くと、そこには見覚えがある春風のような青年が立っていた。

あの、居酒屋で出会った人物だ。

「どういう……ことですか……?」

「君が彼を呪っていたから、手伝ってあげたんだ。もう二度と、彼によって他人が傷つかないようにと」

「呪いを、手伝う……?」

榊は耳を疑う。青年が発する『呪い』という言葉が、じわじわと胸中を蝕むむしのを感じた。

「そう。痛みを消すためのおまじない。気に入ってもらえたかな」

青年は、春の日差しのように微笑ほほえむ。

確かに、榊は矢内に負の感情を抱いていた。呪いだと言指摘されもした。

しかし、呪いを手伝うというのは、どういうことだろう。

「呪術……師……?」

「呪術を使う者をそう呼ぶのならば、僕もそうなんだろうね」

青年は、あまりにもさらりと答える。

「八坂、さん……」

「覚えてもらえて嬉しいよ。君は不動産会社マヨイガの榊君だったね」

八坂は榊の名刺を見せる。居酒屋で話を聞いてもらった時に、榊が渡していたのだろう。

「君の勤務先は、いい不動産を扱っている。お陰で、僕の力も存分に発揮出来たよ」

八坂は一体、何を言っているのだろうか。

榊は状況を把握しきれなかった。だが、一つだけハッキリしていることがあった。

「僕は……こんなことをして欲しいとは思ってません……」

どんなに酔っていたとしても、これだけは確実だ。榊はいかに憎い相手であろうと、実際に苦しんで欲しいわけではなかった。

「どうしてだい？ 呪いを振り撒く者がいれば、呪いを被る者も増える。だったら、より強力な呪いを以て元凶を葬った方がいいじゃないか。そうすれば、苦痛を味わう者も少なくなるわけだから」

「被害を最小限にして、多くを救いたいってことですか……？」

「それもあるけど、他人を呪う者は呪われて当然じゃないか」

一点の曇りもない目で、八坂は断言した。しかし、榊は首を横に振った。

「違う……!!」

「へえ？」

八坂は興味深そうな声をあげる。

「呪いを振り撒かれたからと言って、その人を呪ってしまったら、呪いを振り撒いた人と同じになってしまう……。そしたら、負の連鎖れんが続くだけじゃないか！」

「それじゃあ、君は呪われるけど、他人は呪いたくないってことかな？」

「呪われたくはないけど……。もし、呪われてしまったとしても、僕はそこで止めたい」

「そう——」

八坂は、榊の腕の中で仰向けあおむになっている矢内を見下ろした。彼の雰囲気ふんいきに相反した、冷ややかな目であった。

「これ以上は、君に苦痛を与えてしまうかな。僕は君のような善人を呪いたくはないからね」

榊にそう言ったかと思うと、八坂は踵を返す。

「ま、待って！」

榊はその背中を追おうとするが、次の瞬間、腕の中の矢内がびくんと身体を震わせた。

「お、おげえええつ」

矢内は二、三度咳せき込むと、アスファルトの地面に向かって何かを吐き出す。それは吐瀉物としゃぶつではなく、真っ黒い塊かたまりだった。

「ひっ……」

黒い塊はウズウズと蠢うごめき、一斉に四方八方へと散る。それは紛れもなく、百足の大群だった。

あるものは排水溝に、あるものは路地裏に、あるものは茂みへと入っていく。大量の百足が過ったにもかかわらず、通行人は悲鳴一つあげなかった。

どうやら、榊にしか見えていなかったらしい。

榊はぐったりと気を失っている矢内を抱え、急いで救急車を呼んだ。

矢内は驚くほど衰弱しており、しばらくは入院が必要とのことだった。

意識は戻ったが、抜け殻のように虚ろで、受け答えは曖昧な状態であった。あの騒がしいクレーマーとは思えないほどになっていた。

後日、榊は九重とともに矢内が部屋を借りているアパートまでやって来た。九重が調べると、水道メーターの裏に呪符じゆふが貼はられていた。

「……あの時と、同じやつだ」

呪符を見た榊は、血の気が引くのを感じた。

それは紛れもなく、吉原の家の室外機の裏にあったものだった。

「最悪だ……。酔ってお客さんの住所をバラしたのか……。今回の

は、完全に僕の落ち度だ……」

榊は、その場に頰くずれんばかりに項垂れる。だが、九重はじっと呪符を見つめていた。

「いや、そうとは限らない。君がこの家の家主と接触があり、かつ、呪っていたのだとしたら、その縁えんを辿たどったのかもしれないな」

「どっちにしても、今回は僕の落ち度ですよ。僕が矢内さんを呪わなければ、こんなことにはならなかった……」

「人が人を呪うのは、避けようと思って避けられることじゃない。君は自らの呪いに引きずられなかった。それだけで、上出来だ」

「九重さん……」

九重は涼しい顔で、榊が自身の呪いを拒絶したことを称賛しょうさんする。それだけで、榊の罪悪感は少しだけ和やわらいだ。

「それにしても、俺以外の呪術師とはな……」

「僕も、まさかそんな人が身近にいるなんて思いませんでした。全然、呪術師っぽい雰囲気じゃないのに」

九重は黒ずくめで夜のように静かな人物なので、呪術師然じゆつしにとしているように思える。

だが、八坂は心地よく軽かろやかな、春風のような人物だった。呪いとは縁遠えんそうなのに。

「八坂さんは、どうしてこんなことをするんだろう……。苦痛を味

わう人を減らしたいみたいだったけど……」

それこそ、九重が言っていたような強い信念を持った者なのだろうか。九重の意見を聞こうとした榊であったが、彼の方を振り返って、ぎよっとした。

九重は、ただでさえ少ない表情を完全に失っていた。

「八坂……或人……」

九重の唇が、呪いの言葉のように八坂の名を紡ぐ。

彼の手の中にある呪符は、端からチリチリと黒ずみ、風化したように風にさらわれて行った。

九重に呪いを解かれたからなのか、それとも九重がそうしたのかは分からない。榊はただ、ただならぬ雰囲気の九重を見つめることしか出来なかった。

へつづく